

栗林忠道・中将と「緑ヶ丘」と「英語」

2007. 1. 13

Richmond E.S.

I.Nishida

昨年(2006年)末に封切られた映画「硫黄島からの手紙」の主人公・栗林忠道中将の話題が最近メディアで数多く取り上げられています。

たまたま雑誌に掲載されていた栗林中将の経歴をみて、ふと、感じるものがありましたので以下、駄文を記しました。

(注：栗林中将は、昭和20年硫黄島で享年53歳で戦死された時の階級は中将でしたが、その後、大将に昇任しています。しかし、本文では、栗林中将とします。)

(1) 栗林中将と「八千代緑ヶ丘」

栗林中将は、大正3年(1914年)、23歳で陸軍士官学校を卒業し、その時の最初の任官が、「緑ヶ丘」のすぐ近くの習志野騎兵第15連隊の騎兵少尉でした。

その後の、中将の軍歴は陸軍の中で主に騎兵畑であったようです。

大正9年(1920年)第35期生として陸軍大学校に入学、大正12年(1923年、32歳)同大学校を卒業後、騎兵大尉として再び習志野騎兵第15連隊の連隊中隊長として戻っています

現在の「緑ヶ丘」一帯は昔は習志野台地の一部で、雑木林や桑畑であったようです。今から80数年前、栗林中将は、習志野練兵場の騎兵隊の訓練で、ここ「緑ヶ丘公民館」のすぐ横の木下(きおろし)街道や、成田街道を行軍されていたに違いありません。また、時には愛馬とともに「緑ヶ丘」近辺を散策されたことがあるかもしれません。

その後、中将は、昭和15年(1940年)にも、陸軍少将として騎兵第2旅団長として習志野に戻っています。ということで、我々の地元「緑ヶ丘」となにか浅からぬ因縁があります。

(2) 栗林中将と「英語」

栗林中将の海外経験としては、昭和3年(1928年)37歳の時に、アメリカに留学し、ハーバード大学の聴講生として、語学、米国史の勉強、そして、米陸軍第一騎兵師団や米陸軍騎兵学校で学んでいます。

アメリカ滞在中、各地の視察や、日本人エリートとしてアメリカ人との交流も深めアメリカの国力、アメリカ人氣質などを十分に体得かつ知悉されたに違いありません。

その後、昭和6年(1931年、40歳)に初代のカナダ公使館附駐在武官として派遣されています。

ミリタリ・アタッシュとはいえ、外交活動を通じて当時の日本人に最も欠けていた国際感覚を身につけられたことと思います。(昭和8年帰任。騎兵中佐として陸軍省軍務局馬政課に配属)

ところで、当時の日本陸軍においては、「アメリカ留学」「英語」組は軍内部では非主流派といわれています。本当の主流派エリートは、やはり欧州のドイツ留学が第一で次にフランス、ロシアに留学するものとなっています。

陸軍としては、地上戦の長い歴史を持つこれら欧州の国から学ぶことが大事でエリートをこれらの国に留学させることは当然と言えます。このことから、当時の陸軍上層部での意思決定プロセスでは、栗林中将のような非主流派であるアメリカ留学組みの意見は通らなかったようです。

一方、国際プロトコルが必要とされる海軍においては、当然、エリートを海洋国家であるイギリスやアメリカに派遣し養成していました。(東郷平八郎元帥はイギリス、山本五十六・連合艦隊司令長官はアメリカ・ハーバード大学に留学)

(3) 日米太平洋戦争から「現在」

硫黄島の攻防戦は、映画に描かれている以上に想像を絶する過酷、悲惨な戦いであったに違いありません。昭和20年3月16日、八千代市の半分ほどの面積しかないこの島で日本軍2万人以上、米軍6800人の犠牲者をだして島の戦いは終結しました。

(以下、戦争経験のない小生が以下のようなことを書くのは誠に不遜であることは重々承知していますがここはご容赦願います。)

大きくマクロな歴史の視点から見たとき、1945年(昭和20年)当時の日本政府のトップや大本営の幹部たちは、人類史上まれに見る無責任連中だと思います。すでに日本は陸軍、海軍の戦闘能力はゼロに近く、かつ日本本土では、東京は焼け野原、各地の主要都市のほとんどが米軍の空爆で壊滅状態にありました。にもかかわらず政府指導者は終戦決意をせず、ついに、広島、長崎の原爆攻撃を受けてやっとポツダム宣言の受託を決めました。この結果、日本政府の指導者たちは3百万人以上といわれる同胞国民を(国のためという美辞麗句で)見殺しにしました。いつも思うのですが、戦死者だけでなく、命は落とさずとも戦場で手足をなくすような負傷をされて人、また、想像を絶する異常な戦争体験のためその後長く精神的トラウマに悩まれている戦争犠牲者を入れれば大変な数になります。

普通、戦いの終わりには勝ち負けを決める段階で少しでも有利な条件に持ち込むバーゲニングをやるのが常識です。にもかかわらず当時の指導者は、国体護持の条件だけで他一切の条件をつけずに無条件降伏したのはバカとしか言いようがありません。(今から言えば、少なくとも女性や子供たち民間人に対する人身保護の保障措置、また、終戦直前に火事場泥棒的に参戦し

たソ連に対しては、きっぱりと国後島、択捉島などの固有北方領土の保持条件等を取引条件にすべきでした)

昔、戦国時代の戦で、落城・炎上の前に一族の婦女子を落ち延びさせた浅井長政のような武将もいました。また、幕末の時、江戸に攻め込み江戸を焼き払おうとしていた官軍に対し、幕臣・勝海舟は幕府重鎮を説得し、かつ、敵の西郷隆盛と交渉し、江戸城を無血開城することにより江戸の一般市民の犠牲を極力なくすとともに、徳川将軍家の名誉を保つ形で穏便な政権移譲に貢献しました。この浅井長政や勝海舟らが、昭和 20 年当時の指導者を見たらどのように思うでしょうか。

太平洋戦争が終わって 60 数年経ちました。しかし、このたった 60 数年前、「英語」は憎き「鬼畜米英」の敵国語で、英語を使うものはまさに非国民扱いにされました。それが、今は「英語」は **must** で近々小学校でも必修化されそうです。

国語や算数や理科などの時間を減らして英語の時間を入れるというようなことをすれば、日本人の国際的な学力が低下するのは見え見えで、結果、日本の国力低下に繋がります。(アメリカの小学校ではおそらく外国語の授業はやってないでしょう。小学校で英語授業を必須化すればそれだけ日本の子供たちの小学校での基礎学力のハンディキャップは広がるだけです。) 大事なことは、小学生という学びはじめの段階で、しっかりと母国語である日本語で学び、学習する習慣を身につけて学んだ知識を血肉化していくことです。それを小学校では、歌をうたったり漫画的な幼稚なやり方で英語を教えるなどとは、小学生の伸び盛りの学びの力をまったくにスポイルするという以外何物でもありません。そんなに小学校で英語をやりたければ、好きな生徒たちがクラブ活動的にやるのがよいと思います。そして、中学・高校で知的にも抽象的に物事を考えることができるよう成長した段階になって、正規の英語授業において、日本語と発想、文の構造が大きく異なることを踏まえた英語の 5 文型の基礎をたたきこみ(ボキャブラリーは増やす必要ない)かつ発音記号の読み方をマスターさせることが大事と考えます。

血で血を洗うような戦いを行った日米は、十干十二支が一回りした 60 年後の現在、なんと「同盟」関係にあります。戦死された方から見れば、喜んでいただけるのか、それとも、苦笑いされるのでしょうか。

世界史的に見れば、キリスト教世界とイスラム世界との対立のように何百年以上にもわたって相容れない関係である国、地域があります。つい 60 年前までは、あれほど犠牲を払い憎みあった日本とアメリカがいとも簡単に現在のように「同盟」関係にあるのは、(敗戦という事実から政治的、経済的にはしょうがないとしても) 国民性としてみたとき我々日本人がいささか尻軽なのでしょうか?。それとも、「The Japanese Today」の「Religion」の章で読んだように、日本には政治権力とは別軸となる人々の心に根ざした一神教的な宗教母体がないため、時の為政者によって国民全部が簡単にマインド・コントロールされ集団ヒステリーに陥る性癖があるのでしょうか。ひょっとしてこのような性癖(国民性)が今もあるため、60 数年前の日本人と

まったく同じように、「(強い者勝の) 市場主義経済とそのグローバルゼーション」というアングロサクソンのお題目、術中にはめられマインド・コントロールされているのでしょうか……。
(日本人のアイデンティティは何か、もう一度考えてみたいものです)。

=以上=